

病虫害の発生概況

〔病害発生概況〕

1. 稲・麦

本年の稲作病虫害発生は台風13号通過前後で全く異なる様相を示したことが特徴的であった。台風が8月31日に九州を縦断する前の8月中下旬は高温・多照・少雨によって稲の生育が順調に経過し病虫害の発生もほとんど問題とならなかった。通過後は一転して多雨、寡照、高夜温の気象が9月下旬まで連続し、稲体が軟弱になるとともに各種病虫害の多発生を招く主要因となった。病害では主として縞葉枯病、もみ枯細菌病、紋枯病などの多発生となり、登熟低下とともに北九州の福岡、佐賀、長崎各県の作況を著しく下げ、指数80台の不良となる主因となった。

育苗箱では馬鹿苗病が福岡・佐賀でやや多発した。種子消毒の不徹底が原因とみられ、全国的に増加しているチュウラム・ベノミル剤、チオファネートメチル剤に対する耐性菌発現による効力低下とは考えられない。本田の発生も福岡・熊本で多発した。九州で耐性菌の出現は現在まで確認されていない。

縞葉枯病が長崎、鹿児島、熊本、福岡、佐賀の各県で多発し、発生面積42,400ha（発生面積率14.5%）に達した。媒介虫ヒメトビウンカは稲作前期にほとんど問題になるほどの発生はみられていなかったが、9月に入って急激に増加し、発生した県のいずれも西海岸沿いまたは海岸沿いに発生が目立った。長崎、鹿児島両県では作況低下の一因となった。本病の発生時期、発生分布、被害様相など従来の発生と異なる特異性がみられた。

もみ枯細菌病は本年も多発し、3カ年連続して多発生となった。特に中～北九州各県を主体に、中晩生品種ニシホマレ、レイホウ、ミナミニシキ、ヒヨクモチなどの多発生となった。発生面積119,861ha（発生面積率40.96%）に達し、史上第2位の発生面積を記録し、県別では福岡県の42,339ha（発生面積率69.3%）は史上最多面積となった。作柄低下の一主要因となった。台風通過以降の高夜温（最低気温22～23℃以上）が9月下旬まで続き、高湿度の連続が9月以降出穂の中晩生品種の多発生につながった。

紋枯病も同様に台風通過以降の高温と降雨が病勢進展を助長し、福岡、佐賀、長崎、熊本、鹿児島各県で多発生となった。発生面積217,352ha（面積率74.3%）に達した。いもち病は大分県で品種黄金晴を主体とする葉いもちの局地的多発生がみられ、また宮崎、鹿児島両県では早期水稲コシヒカリに多発した。福岡県では後期発生の枝梗いもちがやや多発生となった。その他、黄化萎縮病が熊本、佐賀両県でやや多発し、また褐穂黄化病が福

岡、大分両県で多くなった。鹿児島県で萎縮病、黄萎病がやや多発し、また縞葉枯病発生田におけるごま葉枯病の多発生が目立った。

九州地域における麦類4麦合計の作付面積が10万haを超え、コムギが58,600ha、2条大麦が40,500ha、裸麦2,000ha他となった。60年産麦の発生病害のうち、特に著しかったのが、大麦を主体とする縞萎縮病の多発生で、福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎の各県で合計発生面積8,400ha（面積率8.3%）の多発生となった。冬期間、比較的高温に経過したためと、播種時期の早いものほど多発した。縞萎縮病と萎縮病とは大部分の地区で発生圃を異にするが、一部地区で両病の混発しているところも見られた。大小麦ともにうどんこ病が佐賀、熊本、大分、宮崎、鹿児島各県で多発生となった。さび病類では赤さび病が福岡、佐賀、熊本、大分各県でやや多発生となった。麦類赤かび病は発生面積32,820ha（発生面積率32.4%）となり、少～中発生にとどまった。本病原菌の産生するマイコトキシンの研究が進み、人畜に対する毒性が明らかにされ、本病防除の徹底が要望されるようになった。その他病害では、福岡県で黒節病がやや多発した。種子伝染性の雲形病、斑葉病、黒穂病などが種子消毒の不徹底により発生増加している現状が指摘された。

2. 転作作物

ダイズ葉焼病が福岡、佐賀両県で早播のアキシロメ品種の発生が多く、有効な登録薬剤もなく問題となった。鹿児島県では台風通過後に本病が多発した。ダイズ紫斑病は福岡県でやや多発生、大分県では紫斑粒率が36%と高率で発生程度が高くなったが、被害粒率は3%以下となり低かった。佐賀県ではダイズ白絹病が連作圃場で多発生となった。大分県ではべと病が遅くなって発生し54%の発生面積率となり、局部的に発生程度が高くなった。

ハトムギ葉枯病が大分県では依然として問題病害とされ、初発後の病勢進展が早い、生育期の薬剤散布が困難、有効な登録薬剤がないなどの問題点が指摘された。

3. 野菜・畑作物

台風通過後の9月の長雨、少照による気象条件が大きく影響し、夏秋作、露地栽培のハクサイ、ダイコン、レタス、ピーマン、カボチャなどの軟腐病の多発生が目立ち、また果菜類のキュウリ、トマト、ナス、イチゴ、ピーマン、ソラマメの灰色かび病が各県とも多発生となった。ナスすすかび病が福岡、佐賀、鹿児島各県で薬剤耐性菌出現による効果低下も加わって多発した。キュウリ、メロン、ハクサイ、キャベツなどのべと病が佐賀、熊本、大分各県で多発した。スイカ、メロンなどのつる枯病が

福岡, 大分各県で多発し, 青枯病がナス, ピーマン(福岡, 大分)に, うどんこ病がナス, キュウリ(佐賀, 大分)などに多発した。ピーマン斑点病が宮崎, 鹿児島, 沖縄各県でやや多発生から多発生となり, イチゴ炭そ病が福岡, 佐賀両県で, トマト, イチゴの疫病が佐賀, 大分, 鹿児島各県で多発した。タマネギ白斑葉枯病が佐賀県で, 春腐病が長崎で多発し, ニンジン黒葉枯病が長崎, 大分で多発した。キュウリ斑点細菌病が佐賀, 大分両県で, キャベツ黒腐病が大分県で, キャベツ黒斑細菌病が宮崎県で多発し, キャベツ根こぶ病が大分飯田高原の連作地帯で, ハクサイ根くびれ病が大分県で, トマト葉かび病, 輪紋病, 根ぐされ萎凋病が大分, 宮崎, 鹿児島各県で多発した。またネギ黒斑病, イチゴ萎黄病が大分県で, ダイコン萎黄病が宮崎県で, カボチャ白斑病が鹿児島県でそれぞれ多発した。モザイク病はキュウリ, ピーマン, ダイコン, ソラマメに大分, 宮崎, 鹿児島各県で多発し, スイカ, トウガンの灰白色斑紋病も沖縄県で拡大発生した。ニガウリにはうどんこ病, ベと病, 疫病が多発した。メロンがん腫症の病原がいまだ解明されず, 宮崎, 熊本両県で問題となっている。サツマイモ根腐立枯病, かいよう病, 黒あざ病が宮崎県でやや多発生となった。

4. 果 樹

カンキツかいよう病が台風通過後の後期に多発生となり, 黒点病も梅雨と秋りんおよび防除不徹底のため多発した。赤衣病が多発し, 灰色かび病, 黄斑病もやや多〜多発生した。そうか病は並発生にとどまった。ビワがんしゅ病は長崎, 鹿児島両県で多発し, ビワ灰斑病が鹿児島県でチオファネートメチル剤耐性菌出現により多発した。新植樹にビワ赤衣病が多発し, 有効剤がないため問題となった。ブドウでは黒とう病が多発生したほかは少から並発生にとどまった。ナシでは昨年多発した黒斑病は少なく, 並発生にとどまった。ナシ黒星病, 輪紋病はともに多発した。カキ炭そ病, うどんこ病が多発し, モモ穿孔病, 縮葉病が多発生となった。最近, 作付が急増しているキュウイに軟ぶ病, 花ぐされ病が多発した。軟ぶ病の果実発生が30%に達する多発生圃もみられた。パインアップル萎凋病, 心腐病は並発生にとどまった。バナナ斑葉病は並からやや多発生となったが, 萎凋病は少発生にとどまった。

5. 茶

炭そ病が佐賀, 熊本, 宮崎各県でやや多発生し, 宮崎県では2, 3番茶に多発した圃も散見された。輪斑病の発生が鹿児島県で初確認され, 2, 3番茶摘採後の発生がやや多く, 3番茶が減収した圃もみられ, 全体的に発生が拡大している傾向がみられた。その他病害は少〜並発生にとどまった。

6. 特用作物

サトウキビ黒穂病が鹿児島熊本地区で少面積ながら多発したが, 大島では少発生, 沖縄県でも少発生にとどま

た。根腐病が沖縄本島北部でやや多発生となった。葉焼病, さび病, 葉片赤斑病などは並〜少発生となった。

〔害虫発生概況〕

1. 水稻・麦

長距離移動性害虫のセジロウカ, トビロウカ, コブノメイガの飛来は少なかった。セジロウカ, トビロウカ共に南部九州で4月5半旬, 西部九州で5月4半旬から飛来が始まり, 南部で数波, 北部九州で4波の飛来があった。しかし, 飛来量からみて主要な飛来は九州各県とも7月10~14日および16~19日までの2波で, 前者は南部九州は既に梅雨明け前の梅雨末期, 後者は梅雨明け直後であった。セジロウカの飛来は平年並か少で, トビロウカは平年より少なかった。しかし, このような飛来量にもかかわらず, 8, 9月の高温多照および一部殺虫剤の効力低下, 防除対応上の問題点などが重なって, 多発し各地で坪枯れを生じた。そして蒔葉枯病の発生と共に, 北部九州の作況指数低下の一因となった。ヒメトビウカも本田初期までの発生は平年並であったが, その後場所によっては増加がみられ, 大分, 宮崎を除き蒔葉枯病が多発し, 特に鹿児島県の薩摩半島, 長崎県の西海岸では近年にない発生であった。しかし, 昭和30~40年代にみられた発生が, 植付直後の初期感染であったのに対し, 7月後半から8月上旬にかけての後期感染で, 鹿児島, 長崎いずれも早期稲での発生は少なく, 普通稲で発生したことが特徴的であった。

コブノメイガは7月3半旬から4半旬にかけての飛来が主要な飛来波であったが, 飛来量は少なく, 大分を除いては発生は並か少にとどまった。

イネミズゾウムシは各県共に増加傾向にあるが, 特に佐賀, 長崎, 熊本で著しく, 熊本では阿蘇, 球摩地方でも発生し, 宮崎ではイネゾウムシと混発している。さらに沖縄では北部4市町村で初めて発生を確確認し, 1期作, 2期作のいずれにも認められた。

前年から問題になっていたラブラタリゴガイによる水稻の被害が初めて発生し, 熊本, 鹿児島で被害面積は大きく, 早期稲, 普通稲のいずれにも認められた。梅雨期の大雨による水田の浸冠水で, 用水路からの貝の流入による被害が報告された。

その他の害虫として, コバネイナゴが宮崎県西北部普通稲19haに7月下旬多発した。

麦では福岡でシロヒトリによる小麦, ピール麦の被害がみられ, 佐賀ではシロトビムシ, ヤノハモグリバエによる小麦, 大麦の被害がみられた。

2. 転作作物

熊本, 宮崎, 鹿児島を除く各県で大豆にハスモンヨトウが8月下旬以降近年にない多発生となった。8, 9月の高温多照が一因とみられる。

昭和60年 水稻主要病害虫の発生並びに防除面積

(単位: ha)

病 害 虫 名	福 岡		佐 賀		長 崎		熊 本		大 分		宮 崎		鹿 児 島		沖 縄	
	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積
(病 害)																
葉 い も ち	22,503	47,002	9,784	52,394	5,600	18,000	18,400	52,500	31,710	46,000	19,346	34,970	12,180	18,170	71	380
穂 枝 梗 い も ち	38,385	90,812	3,279	83,460	2,000	24,000	9,250	43,000	34,973	59,000	18,853	41,060	12,523	23,750	16	358
紋 枯 病	40,323	85,419	38,133	67,830	10,500	28,000	35,500	88,000	34,424	43,000	26,959	22,240	24,677	57,885	51	78
白 葉 枯 病	2,623	9,007	887	2,000	30	100	2,050	8,400	3,370	7,000	2,556	6,750			15	—
も み 枯 菌 病	42,339	8,950	29,267	0	6,000	500	19,800	—	10,930	5,000	1,423	0	10,102	500		
縞 葉 枯 病	5,844	—	1,550	35,700	10,737	—	2,000	—	4,960	—	0	—	17,280	—	71	132
萎 縮 病	5,560	—	3,203	35,700	7,000	—	5,000	—	4,100	—	7,915	—	13,919	—	—	—
黄 萎 病	0	0	0	0	100	—	—	—	0	—	2,830	—	2,999	—	—	—
ご ま 葉 枯 病	14,838	16,620	2,723	0	3,100	—	150	5,000	13,170	—	4,872	0	12,671	6,470	86	130
小 粒 菌 核 病	10	0	0	0	2,000	2,000	200	—	1,300	—	0	0			—	—
心 枯 線 虫 病	20	46,885	0	35,000	1,550	8,000	250	1,700	7,830	22,000	2,520	8,730	3,259	11,140	2	1
(虫 害)																
ニカメイチュウ (第1世代)	0	12,061	0	0	0	0	—	—	600	15,500	0	0			—	—
ニカメイチュウ (第2世代)	1	9,590	0	0	0	0	—	—	450	14,500	0	0			—	—
セジロウンカ	57,731	155,966	28,499	55,904	22,500	78,000	18,900	64,500	13,490	46,000	19,670	79,350	26,021	39,900	209	394
トビロウンカ	51,467	171,262	28,655	243,390	21,400	85,000	26,600	92,100	17,200	80,000	13,939	80,300	24,721	94,202	175	394
ヒメトビウンカ	37,795	152,518	3,200	55,904	12,000	30,000	9,500	25,600	3,600	40,000	27,123	27,120	11,712	—	138	431
ツマグロヨコバイ	52,144	152,418	38,783	55,904	16,000	25,000	32,600	97,200	12,430	60,000	30,340	27,120	28,386	39,395	269	260
イネネットムシ	3,227	45,469	290	54,781	1,000	1,000	4,800	—	8,440	1,000	1,637	6,810	1,962	90	22	85
コブノメイガ	33,675	93,846	19,352	54,781	11,000	28,000	12,700	12,180	29,370	51,000	10,742	8,720	26,427	47,870	201	539
フタオビコヤガ	83	83	0	0	50	0	300	3,000	2,300	300	1,797	6,810	5,931	170	—	—
アワヨトウ	186	8,585	300	0	0	0	900	—	25	0	1,508	5,038	427	—	1	70
イネゾウムシ	8,101	8,939	4,105	38,500	4,000	500	—	—	7,570	7,500	10,758	8,860	1,030	30	1	—
イネミズゾウムシ	55	700	546	1,801	1,436	1,810	280	400	10	122	4,491	8,860			89	183
カメムシ類	1,721	36,185	800	15,200	10,000	16,000	12,100	6,600	6,300	15,600	5,952	27,382	2,500	10,000	192	414
総作付面積(292,645)	61,100		39,900		22,700		61,300		37,600		31,500		37,800		730	

注) 防除面積は延面積を示す。宮崎、鹿児島は早期・普通期の、沖縄は一・二期作の合計を示す。

3. 野菜・畑作物

ミナミキイロアザミウマは九州各県のナス、キュウリ、スイカ、メロン、沖縄ではさらにトウガン、オクラ、ニガウリなどに多発した。オンシツコナジラミはトマトとキュウリで、アブラムシ類は夏後半の高温乾燥条件によりナス、スイカ、メロン、ソラマメ、イチゴ、レタス、ダイコン、サトイモに、ハダニ類はナス、スイカ、メロン、イチゴで多発した。そのほか、チャノホコリダニ、ウリミバエ、ネコブセンチュウ、コナガ、ハスモンヨトウ、アシピロヘリカメムシ(キュウリ)、ネキリムシ、ワモンヒヨウタンゾウ(ゴボウ)、メイチュウ類(ショウガ)、モンシロチョウなどがあげられる。ハスモンヨトウは大豆畑周辺のイチゴで多く、コナガはピレスロイド系殺虫剤に対する感受性の低下が問題となっている。新発生としては大分県でネギを加害するシロイチモジトウがあげられる。ウリミバエについては不妊虫放飼による根絶事業が続けられているが、奄美群島喜界島では過去33カ月間寄生果は発見されず、60年10月24日付で寄生植物の移動の禁止および制限が解除された。

サトウキビでは鹿児島、沖縄でカンシャコバネナガカメムシが多発した。沖縄ではさらにアオドウガネ、サト

ウキビチビアザミウマも多発した。

ラブラリンゴガイは熊本でレンコンに、鹿児島では奄美大島のミズイモに、沖縄では、ミズイモ、イグサのほか食用マコモにも被害がみられ、今後分布の拡大が憂慮されている。沖縄を除く九州各県で分布の確認された市町村数は153に達した。

4. 果樹・茶樹

カメムシ類の多発生が長期に及んだことが本年の特徴といえよう。宮崎ではツヤアオカメムシが主体であるが、他県ではチャバネアオカメムシを主に、カンキツナシ、カキ、モモなどで多発し、通常は被害の少ないとされているブドウにも被害がみられた。多発の原因は、越冬密度が高かったこと、スギ、ヒノキなどの穂果が少なかったこと、7月の高温乾燥によって幼虫の死亡率が低かったことなどがあげられる。ブドウには長崎、熊本でチャノキイロアザミウマが、宮崎、鹿児島ではカンキツに多発した。

南西諸島ではミカンコミバエの根絶を目差して、メチルオイゲノールによる雄成虫除法により作業が進められてきた。八重山群島では57年4月から開始されたが、59年9月に西表島の1頭誘殺を最後に根絶に成功し、61年

2月6日から寄主植物の移動が解禁となった。大正8年の侵入以来、実に67年ぶりに日本から一掃された。

ビワでは長崎でナシヒメシンクイ、鹿児島では熊本地区でクワゴマダラヒトリが多発した。

クリでは福岡県でクリタマバチ、大分でカミキリムシ

類、カツラマルカイガラムシ、宮崎でクリノミキクイムシの発生が目立った。

茶樹ではチャキイロアザミウマが熊本、宮崎、鹿児島などで、カンザワハダニが熊本、鹿児島で、鹿児島ではさらにチャノコカクモンハマキの発生が多かった。